たとえば，第2表は山地・海辺・寒暑・風俗の2つづつの組合せの度数を示すものであって，2要因の相関などが見易すい．ところで，第2表から知られる主な結果は次のようである．

(1) 山の少い国は暖かく，山の多い国は寒い傾向がある．

(2) 「軽薄」は山の多少にあまり関係はないが，「実義」は山の多い方で圧倒的に多い．

(3) 海浜の多少と山の多少は逆相関がある．

(4) 海浜の多いほど暖かく，海浜の少いほど寒国が多い．

(5) 海浜の多いほど「軽薄」が多く，海浜の少いほど「実義」の国の多い傾向がある．

(6) 気候の寒暑と「軽薄」および「実義」の多少には関係はない．前節で関係があるようにみられたのは，山地と寒暑の間の正相関のためであろう．

5. あとがき

「人国記」所載の気候記事の分析により，この特異な著者のもっていた考えの大要をうかがうことができた．なお，多くの要因からなる複雑な現象を分類するのに3進法の便利なことを示したのであるが，この方法が将来多方面に活用されることを期待したい．

参考文献

1) 渡辺次雄，1954：「増補華夷通商考」所載の気候について，天気，**1**，19～21.

2) 三枝博音・清水幾太郎編，1956：日本哲学思想全書，第19巻歴史論篇・社会篇，平凡社，371 p，(pp. 147～204参照).

気象学と地理学のあいだ

── 吉野正敏：「小気候」にことよせて ──

渡　辺　次　雄

マッハの力学史をよむと，よくもこんなことを本気で考えたものだ，とおもわれる史実にぶっつかる．たとえば，落体が次第に速度を増す現象の説明として，「旅人は目的地に近づくに従って次第に歩みをはやめるではないか」といったたぐいである．しかし，実は，この種のことは今でも絶無ではない．

気象学が気候学から生れ，気候学はもと地理学の一部にすぎなかったころ，気象（学）がもっていた使命と期待が今日とちがっているのは当然であるが，気象学は一人立ちするにつれて別な方向に動いているのではないか，とおもわれる点もある．これが，気象教材の問題になるといちじるしく表面にでてくるのである．今こそ，われわれは気象・気候・地理がまだわかれていなかった時代に帰って，地人相関ならぬ気人相関の立場から気象学を再編する必要があるのではあるまいか．今の気象学だけが気象学ではない!!

その点で最近地人書館から刊行された吉野正敏（小気候）は甚だ示唆的である．著者がまえがきの中で，従来いくつかの小気候の著作があるのに，＜私のようなものが，こういう本を書くことに対して，かなり抵抗を感じた＞といいながらも，＜私としては，本書が終着点ではなく，本書を出発点として，ここから進みたいと思っている．つまり，出発点としてのご批判をいただくつもりで，書いたものである＞と述べている．実際，本書ははなはだ意欲的であり，小気候の地理学的側面が強調されている．これわまさに，いわゆる気象屋にはほとんど不可能な仕事であって，しかも，従来の地理屋もあまり手をふれえなかった仕事である．

吉野氏が，これが出発点であるというとき，将来へのどのような計画をもっておられるかよくわからないが，本書は気候学と地理学の間を埋める努力をし，大いに成果をあげたとはいうものの，その地理学は自然地理に限られていたとおもう．さらに一歩進んで，気候学と人文地理学との間を埋め，さらに，気象学と人文地理学の間に関連をつけることがのぞましいとおもう．しかし，それはもはや，気象学ではなく，地理学そのものなのだといわれるかも知れない．それで結構である．名前の如何を問うのではない．盲点の存在を強調したいのである．

気象学的側面にかたよって考えると，地形・地勢・地物との関連において気象学を再編した，いわば地理的気象学の必要性も指摘しておきたい．

ともあれ，吉野正敏氏の「小気候」はとくに気象屋に読んでいただきたい本である．そして，一人一人の意見を聞きたいものである．